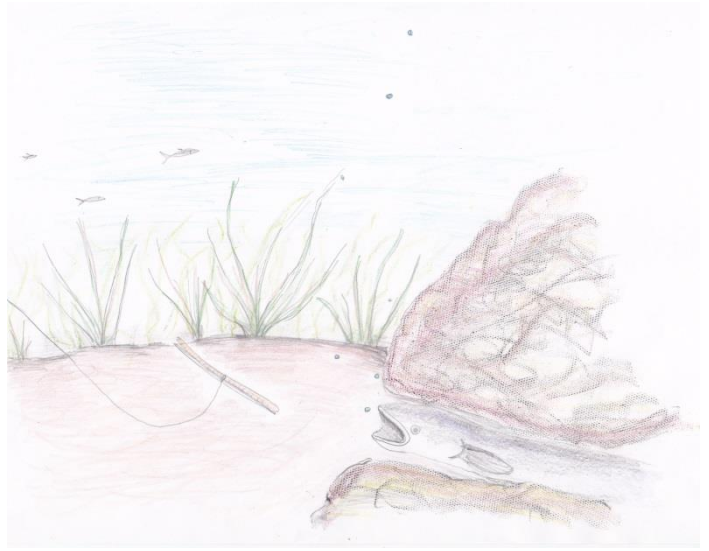


釣り 地ごく針

～酒井明 説話集 37～



釣りというてもいろいろあるが、一般的に魚を釣ることをいうが、昔は鳥なんかも釣る方法があった。ちょっとかわいそうだが、昔の人はいろいろな事を考えてやっていたとみえる。

家の裏山なんかで、竹ひごの短いのにミミズをつけて、まん中を糸でくくって釣っていたという。

引っ掛かりもない竹ひごで、どうやって釣るのかというと、鳥が竹ひごをミミズごと「たて」に呑み込んで、腹の中で引っ張ると横になって引っ掛かるというわけじゃ。

魚を釣るのもこれと同様で、針金の両方とがらせた短いものでミミズをさしてまん中をくくる。これを呑みこんだ魚がどうも変だと逃げようとして引っ張ると、針が横になって腹の中で動かなくなる。

動かんどころか、腹から外に付き出して何ともならんようになってしまう。そこを引っ張りあげて、その針を引き抜くと魚はそれ程大きな傷も負わずに捕まえられるという方法じゃ。そんな針を地ごく針と呼んでいたようだ。うなぎを釣るにはなかなか、重宝したらしい。

今は釣りというたら、釣針じゃあ釣糸じゃあいうもんが色々いるが、昔の人はそんなもんなくても、丈夫なつる草や、竹や、針金どんなもんでも工夫し、相手の癖をつかんで、それに合うた方法を考えてやっていた。

今時ちょっと思いつかんことでも、昔の人はよう考えてやっていたもんじゃと感心する。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。